フィンランド・日本　外交関係樹立100周年　記念展

Yu ANDOH & Emiria TANNER　PAPER WEIGHT　紙の重さ

8月26日（月）16時30分～18時半

～日本とフィンランドの文化・アートについてのお話～

フィンランドセンターからパシ・ヤルヴィネン氏を迎えて

場所；鳥取市　ギャラリーそら

Yu＞　本日は多くの皆様にお越しいただき,ありがとうございます。 展示としては私とエミリアさんの展示です。今回は東京のフィンランドセンターから Pasi さんにゲストで来ていただいています。 そして、本日はフィンランドと日本の文化の似ているところや違うところ、またアートについても話してきたいと思います。
先ず、自己紹介から始めます

エミリア ＞ こんにちは。フィンランドからきましたエミリアと申します。
ヘルシンキ美術大学の 修士課程で学んでいます。現在は筑波大学で5ヶ月間の留学期間中に日本の版画のことを勉強しました。その留学の最後にこの展示に向けて作品を制作して来ました。 私は日本の文化やアートについて興味があったので日本に留学したかったのです。

パシ ＞　皆さんこんにちは。私はパシです。去年の 10 月から東京のフィンランドセンターの プロジェクトマネージャーをしています。それまではフィンランド国立美術館に8年間勤めていました。今はフィンランドセンターで文化交流を担当しています。 フィンランドセンターのことを知らない方もいらっしゃると思うので紹介します。大きく言うと3 つのメインのテーマがあり、それらは文化、科学、高等教育となります。高等教育はフィンランドに留学したい日本の皆さんを支えます。科学のほうは様々なセミナーを開いたりします。 この間はAIと高齢化についてセミナーがありました。今年は外交関係の100周年となります。ラムステッドという方が初代在日大使になっていますのでお祝いの会を開催します。 また文化・芸術に関しては、今回のギャラリーそで展示を開催することを支援することもそうですし、アーティストのプログラムを企画運営する催し物が現在までに6つあります。またフィンランドセンターからの奨学金もあります。

Yu＞ 安藤悠です。鳥取出身で現在はヘルシンキで生活しています。今回はフィンランドセンター からの支援もあり、アーティストを招く形でもともと友達でもあったエミリアと展示をさせて いただけることになりました。では、日本とフィンランドの文化の違いについ

て話していきたい と思います。 日本人の視点よりも、もっとフィンランド人がどう相違点を見ているか気になると思います。お2人の考えはどうでしょうか。

エミリア> 私は筑波大学に留学して日本のアート教育や、アートを勉強する学生が 関わるプロジェクト、どういう勉強をしているか、ギャラリーの展示を見に行ったりしたので、その違いについても話せると思います。 筑波大学に来たときに木版画を勉強したのですが、その技術をどう教えてもらったのか紹介したいと思います。 受けた印象なのですが、長い間、じっくり見て詳細に美しさ、完璧さを求めている気がします。例えばアート クラス授業中に板を準備してあって、角を45度に磨くときフィンラ ンドでは板をそれほど完璧に美しくするわけではなく、日本ではすでにそこから完璧さを求めるのか・・・と驚きました。私にとって基礎から勉強することかができてとても興味深かったです。
フィンランドと違うところは、フィンラントドのほうはもっと大きな目で見て、準備にそれほど時間をかけないところだと思います。これは初めて気付いた1つの違いでした。

Yu > 日本ではテレビや雑誌でフィンランドの姿が伝わっていると思いますが、それ以外での違いは何かありましたか?

パシ >日本に来たときに気付いたのは、日本人はフィンランド人よりもアート展示に興味を持 っていることです。例えば、東京での展示だったのですが、1時間以上の行列ができていて、フィンランドではあり得ないことです。行列ができるのは展示の最後の日くらいですから。 フィンランドのほうでは今日のようなアーティストトークは残念ながらあまりないです。もしアーティストが話すのであれば、基本的に作品を紹介するギャラリートークをする形態で、このようなディスカッションはありません。

エミリア> 私はアーティストブックに非常に興味があるのですが、 展示をしてみて気付いたのですが、日本人はフィンランド人よりも作品を見ることに時間を掛けています。フィンランド人より作品をより長く楽しみたい人が多いと思いました。

Yu > エミリアさんのアーティストブックはテーブルの上に置いてあります。

エミリア > パシさんも言ったように、日本人はわざわざ行列ができるほど展示に並ぶのはやはり素直にアートに興味があると、同じ理由で作品も長く見ているのではないかと思いました。

Yu > 私自身の意見です。私は日本の代表ではないですが、日本では並ぶこと自体に意味を見出している、並ぶイコール人気がある。つまり、必ずしもアートに興味があるわけではないと思うのですが、どうでしょう?

パシ ＞　私はただ素直にアートに興味があるかと思っていたのですが、日本の学校においてのアート教育に関連するかと思っていたのですが、あまりそこについては詳しくないので、日本のア ート教育について説明いただけたらうれしいです。

Yu ＞ 僕は引きこもりだった時期があり、あまり学校に行っていなかったので美術教育について詳しくないのですが、中学の教科書に載っていることは非常に断定的でした。アーティストはうそをつくこともあり、必ずしも作品をちゃんと説明するわけでもないので、そういう教育の仕方、説明の仕方は良くないと思いました。

パシ ＞ そうですね。そこはもうすでに1つの違いなのですが、フィンランドではアートの教科書はないのです。実際に手を使ってやるという教科です。だから、美術歴史とかそういうものはなく、絵を描いたりすることがメインです。自分でいろいろな技術を学んで作ることがアートという教科です。 アートの歴史、美術歴史を学ばないからこそ、知識がなくて展示に行くのをフィンランド人は恐れているのかもしれません。

エミリア ＞　ヘルシンキではアーティストではない人々が美術館には行くのですが、ギャラリーにはあまり行きません。ギャラリーに行く人はアーティストが主です。アーティストではない人がギャラリーに行くのは恥ずかしくて、知らない名前や技術が出てくるのが怖いということもあるようです。

パシ ＞　さっき行列ができるということについて話したのですが、やはりフィンランド人も日本人と同じく人気だから並ぶということもあります。この間、ヘルシンキに新しい美術館ができて、東京のチームラボの展示をしたのですが、
2〜4時間の行列ができていました。でも、それはた ただ人気だったからです。

エミリア ＞　そうですね。チームラボの展示はやはりそういうちょっとした現象になったのではないかと思います。ニュースに取り上げられていました。

パシ ＞ もう1つは草間彌生の展示だったのですが、あれは結構インスタ映えするような色使いで、写真を撮りにいったのを自慢する人が多かったようです。

Yu ＞　チームラボの展示があった美術館は新しくなって初めての展示が日本のチームラボの展示だったようですが、それはどういう意味があるのでしょうか? フィンランドの多くの人は日 本のアートに興味があるのでしょうか?

パシ＞　そう思います。この2つの大変人気だった展示は少なくともかなり概念的な展示だったのですが、そんなに理解する必要がないような展示でした。

エミリア〉　このSNSという部分も大変面白いと思うのですが、そのSNSの影響もあって、アーティストたちは作品がインスタに載せるとどう見えるかを気にしている人が多いようです。一部の人は良い展示を作るよりインスタ映えばかりを考えている人もいるようで、それもまた面白 い現象だと思います。草間彌生さんの展示は大変インスタではやっていました。みんながインス タに展示の写真を載せたかったようです。

Yu〉 日本のギャラリー、これまで説明してきた草間彌生などの展示は美術館の展示だったので すが、フィンランドのギャラリー展示は日本のものとどう違うのでしょうか?

パシ〉　基本的には同じようなものだと思います。大きなギャラリーが有名なアーティ ストの作品展を開いたり、小さなギャラリーは知名度が低く若いアーティストを展示したりします。東京ほどギャラリーの数は多くはありません。 あとは、日本ほどアートは人気が高くないと思います。東京などで開かれる大きなアートフェスティバルのようなものはないです。小さなアートフェスティバルは美術学校がプロデュースするものはあります。

Yu 〉　日本と比べてフィンランドは国土が同じぐらいなのですが、人口は北海道と同じぐらいで す。フィンランドのカラヨキという人口はどのぐらいでしょう? た多分3万人ほどなのですが、それほどの小さな町でもギャラリーがあって、展示をしたりしているのです。その点、フィ ンランドの小さな町の展示と鳥取のような田舎のような展示と違いがあるのですか?

ペトラ（通訳者）　〉　カラヨキの人口は1万人です。

パシ ＞　私はカラヨキには行ったことないし、鳥取も初めてなので すが、このギャラリーはヘルシンキの典型的なギャラリーより大きいです。でも、フィンランド では小さな町でも夏になるとギャラリー展示があったりします。(冬でもしますが主に夏)

エミリア 〉　私もこのギャラリーに入って大きくて驚きました。東京でもヘルシンキでもギャラ リーのサイズはもっと小さいです。

パシ 〉　ちょっとエミリアさんに質問です。エミリアさんの大学が持っているギャラリーはいくつかあると思いますが、それ以外のギャラリーでは展示はしにくいですか?

エミリア 〉　結構難しく感じます。私は組織に入っているので、彼らが持っているギャラリーには申し込むことができるのですが、組織やグループが持っているわけではないギャ

ラリーは展示 をするのが難しいです。一部のギャラリーでは申し込むことができず、ギャラリー側が紹介状を送る形になっているよ うで、難しさを感じます。

Yu＞ 僕はギャラリーそらは申し込みしやすく、いろいろな人たちが集まる面白いスペースだと思うのですが、フィンランドでもそういうところはありますか?

パシ＞ 規模の小さいギャラリーは人を引き寄せるのは困難ただと思います。大きなギャラリーは 人気だから、人はある意味、そこのみんなに自分を見せるためにも行ったりしますが小さなキギャラリーは大変だと思います。

エミリア＞ あと一部のギャラリーは若い世代、これからキャリアを始めようとしている世代に 非常に興味を持っているのですが、そこにかなりギャップがある場合もあります。若い人たちは その分野で何が起きているか知らなかったり、ギャラリーは若い人たちを知らなかったりする ことがあります。

パシ＞ 安藤さんが言ったとおり、リラックスしているギャラリーだと思いますが、フィンランドの方はもうちょっと厳しいですね。東京では誰でも展示できるギャラリーもありますが、フィンランドでは厳しいです。

エミリア＞ ヘルシンキでもこのギャラリーのような雰囲気がもっとあってほしいです。誰でも展示スペースをレンタルできるという。どうやって誰がするのかが分かりやすいほうがいいです。

Yu ＞ 鳥取にもたくさんアート教育を受けていないアーティストがたくさんいると思いますが、フィンランドではそのような人たちはギャラリーを借りることができるのでしょうか?

パシ＞ そういう人にとってギャラリーで展示するのは難しいと思います。フィンランドでは自分アートという概念があって、自分アーティストは笑われることもあります。評価が低いのです。

エミリア＞ あともう1つはアート学校に入るのはフィンランドでとても難しいです。最近一部 は閉鎖されたりしていて、アート教育を受けることが非常に難しいのです。私も3回入学試験に挑戦して、ようやく今の大学に入れ ました。

YU ＞ フィンランドのアートシーンから日本のアートの世界が学べることはどんなことがありますか?

エミリア ＞　1つは日本のアーティストの態度がとても良いと思います。働き者で、フィンランド のアーティストのほうが文句を言ったりするのですが日本人は働きながら自分の夢を目指しているような人たちも多いように感じます。

パシ＞　なので、逆にフィンランドのアートは日本のほうからアドバイスを受けるべきだと思います。

Yu ＞　面白いですね。日本人からすればフィンランドのいろいろな面を学べることがあると思うのですが。例えば、仕事環境の面でもそう思うのですが。

パシ＞　1つはよく日本人からフィンランドの休み期間についてうらやましいなどというコメン トを受けますが、この間 4 週間の休みを取っていたのですが、じゃあ、どうやってコンタクトを 取ればいいですかと聞かれて、休みだからコンタクト自体取れませんと。その概念自体ない。

エミリア ＞　私は日本で働いたことはないのですが、見ている限りは結構大変で、達成目標が高かっ たり、自由時間がなかったりするように思います。

Yu ＞　日本のアートだけではなくて、アートとそれ以外のものをつなげる要素としてデザインがあると思うのですが、フィンランドで鳥取のデザインを展示する機会があったのですが、フィンランドの人はとても共感してくれました。それは自然やそういったものをくみ取って くれたように思うのですが、どう思いますか?

パシ＞　フィンランドと日本のデザインは共通点が多いです。シンプルな形とか、自然な要素が使われたりすることが共通点です。この間フィンランドの家具のお店が東京にできたようですが、結構人気なようです。

エミリア ＞　つながりはあると思います。シンプルな形とか色とかを重要にしているところですね。

Yu ＞　マリメッコなどは非常に色使いがカラフルなのですが、私が聞いた限りではフィンランド の人たちは派手な色が好きな一方で着るのはモノクロが多いです。フィンランドでは色につい てはどのような考えがありますか?

エミリア＞　今日皆さんを見渡す限りではちょっと落ち着いた色が多いように思いますが、そう いうところはもしかしたら共通点かもしれません。

パシ＞　そうですね。人々はそういう特別なイベントとかにはマリメッコを使ったりしますが、日 常生活ではあまり使いません。

Yu＞ 例えば、エミリアさん、フィンランドの冬は白かグレーみたいな感じがあるのですが、エミ リアさんの展示は一瞬、白なのですが、よく見ると光と影を映し出しているような作品が多 いと思います。そのような自然に見える細やかな違いを楽しむ文化があるのでしょうか?

エミリア ＞ こういうエンボス作品を作っていたときは、もし日本で展示することがあればとても受けるのではないかとコメントをもらいました。色使いとか。

Yu＞ いろいろ面白い話をもっとお伺いしたのですが、もし皆さま、何か質問が日本に関して、フィンランドに関してあれば お2人に聞いてください。

Yu ＞ 質問はひとまずこれぐらいにして、これから交流会に移りたいと思います。どうも皆さんありがとうございました。

日本海新聞　8月30日掲載　より

日本・フィンランド「懸け橋に」　両国２人が作品展

　フィンランドのヘルシンキを拠点に創作活動を展開する安藤悠さん（３３）＝鳥取市出身＝と、友人でヘルシンキ美術大大学院生のエミリア・タンナーさん（２８）の作品展「紙の重さ」が同市栄町のギャラリーそらで開かれている。今年は日本とフィンランドの外交関係樹立１００周年の節目。両国の懸け橋にとの思いから企画した。９月４日まで。

作品展を開いた安藤さん（左）とタンナーさん＝鳥取市栄町のギャラリーそら

　安藤さんは鳥取環境大を卒業し、現在はヘルシンキで作家のほか翻訳やライターなど多方面で活躍。タンナーさんは現在、筑波大で交換留学生として学んでいる。

安藤さんは張り子のように紙を貼り合わせ人の顔をかたどったオブジェや、自分の内面を投影し心のゆらぎなどを表現した線画の抽象画約２００点を出品。タンナーさんは、ぬらした真っ白の紙の上で鉄などさまざまな模様をプレス加工して凹凸を表現した作品６０点を展示し、紙の奥深い世界観を表現した。

安藤さんらは「鳥取で作品を披露できてうれしい。今後も両国の友好につながる展開を試みたい」と話した。（三野夏美）